The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	臨床老年行動学に向けて ： 教育心理学からのアプローチ
Author(s)	山本, 恵子
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1996, 22, p. 231-246
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8877
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

臨床老年行動学に向けて

―― 教育心理学からのアプローチ ――

山　本　惠　子

目　次

Ⅰ．はじめに　－臨床老年行動学とは－
Ⅱ．教育心理学の立場からのアプローチ
Ⅲ．おわりに　－<力強く生きるための死への準備教育>に向けて－

臨床老年行動学に向けて

―― 教育心理学からのアプローチ ――

山　本　恵　子

Ⅰ．はじめに

Ⅰ－1．臨床老年行動学とは

臨床老年行動学講座は、1993（平成5）年に開講された、大阪大学人間科学部の中では比較的新しい講座である。初代の講座主任である柏木哲夫教授の平成7年度授業計画書（シラバス）によると、「臨床老年行動学」の講義では、「死」と「老い」という2つの大きな課題を主軸として、具体的には、前者については「現代人の生と死」・「病院死の問題点」・「末期患者のケア」・「ホスピス」・「ターミナルケア」などについて、後者については「老人の精神機能」・「鬱状態・老人痴呆・自殺などを中心に老人の精神障害」・「老人のケア」・「老人とのコミュニケーション」などについて、“臨床的”に論じ、また「老いと死」以外にも広く、精神医学、心身医学、臨床心理、カウンセリング、ソーシャルワーク、生命倫理などの主要テーマについても論じる、とその内容が説明されている。また、“臨床的”側面からの「老いと死」についての講義を通して、人間の「老いと死」の“現実”を知り、限りある「生」を考えることで“現実に生きている”人間を理解することを「臨床老年行動学」の講義の目的・ねらいとしている。

以上のことから、「臨床老年行動学」がかなり広範な複雑多岐にわたる研究課題をもつ、いわば<学際的な研究領域>であることが容易に理解されるであろう。

そこで、本稿では、これまで筆者の主専攻としていた「教育心理学」の立場を起点にして、この「臨床老年行動学」の研究課題をどのようにとらえ直し、それに対してどのようにアプローチしていくことができるのか、その方向性を探ることを目的とする。

Ⅰ－2．臨床老年行動学の研究課題とは

さて、「臨床老年行動学」講座を端的に紹介・表現するならば、「人間の老いと死を人間科学的に研究する講座」で「人間理解をめざす講座」となるであろうが、前述の柏木哲夫教授によ

る「臨床老年行動学」の多岐にわたる講義内容を本稿での考察の出発点として、本章ではさらに「臨床老年行動学」の研究課題として想定される内容について検討することにしたい。

ところで、人間によって最初に書かれた文献のテーマは「老化と死」についてである、と言われる。この事実から人間にとって「老化と死」がいかに大きな関心事であったのかが分かるであろう。その後も、人類はこの「老化と死」を避けるためにどうするべきか、営々と問い続け孜々として倦まず研究している、と言っても過言ではないだろう。確かに、私たちはその科学研究の成果・医療技術の進歩によって、ある意味で「死」をコントロールすることに成功したかもしれない。しかし、その結果、逆に人類がこれまでに経験したことのない高齢化社会が出現して、旧くて新しい課題であるこの「老化と死」の問題に再々直面することなり、しかもこれまでとは別の方略で挑戦せざるをえない状況の中に、私たちは置かれているのである。

たとえば、<尊厳死の問題>もその一つであろう。野原忠博・朝野聡（1988）も指摘するように<高齢化社会における <死のあり方> と <家族問題> >、<死と直接かかわりあいをもつ医療従事者の役割と葛藤>、<死が国家と個人に与えるリスク>、<死をコントロールしようとする過程にみられる社会倫理上の意味づけ>等々、人間の実存と深く関わる、多くの問題提起がなされており、それには枚挙に遑がないほどである。

Ⅰ－2-1．日本人の死生観をめぐって　－　近代の日本人の代表的な死生観　－

本章（Ⅰ）での考察をより具体的に焦点化して進めて行くために、本項では「近代の日本人の代表的な死生観」について、その概略だけに触れておきたい。

松岡寿夫（1992）は、近代の日本人の代表的な死生観を、以下のように3大別して端的に紹介している。

①<多重層的死生観>とは、私たちの死生観の最古層にある農耕民族的・神話的・シャーマニズム的・アミニズム的な死生観に神道や外来文化的な仏教的・キリスト教的・儒教的死生観が無意識的に複合した死生観であり、さらに社会文化的機能である同質化、日本人の精神構造の特徴である受容的・忍従的・ホンネとタテマエの二重性・深層心理的な母性原理が彩を添えている死生観である。

②<集団主義的・現世主義的な死生観>とは、家族、血縁共同体、ムラ共同体のもとでの死を大切にし、集団所属性は死よりも強いとし、死を文化の此岸性の中にとらえる死生観である。

③<調和的宇宙観に基づく哲学的イメージをもつ死生観>とは、物理的自然ばかりでなく、すべての生物を含み、死者の魂さえも包みこむとする、宇宙観に基づく死生観である。そして、自分自身を包みこむ母性原理的な宇宙的感性である、というような哲学的イメージをもつ死生観でもある。したがって、死とは自然のふところにかえることである、と考える。すなわち象徴的不死性を自然にもとめ、先祖と自然とに一体化するのである。それはキリスト教的な永遠の生命に相当する先祖崇拝の態度かもしれない。死後も現実の風土の中で生き続

けたいという希望を持ち、彼岸、浄土を故郷の山の彼方におくものである。

Ⅰ－2-2.『大往生』をめぐって

近代の日本人の死生観は前述のように概観することができるであろうが、さらに考察を焦点化して行くために、昨年から話題になっている「大往生」を取り上げ、前述（Ⅰ－2.）のような状況に置かれている私たちの「死」への関心・態度がいかなるものであるのか、を探る考察の手掛かりとしたい。

a)永六輔の「大往生」論

そこで、永六輔（1994）の『大往生』をいう本がよく読まれてベストセラーになった、という一つの現象を取り上げてみることにしよう。

ちなみに、『大往生』二百万読者におくる待望の第二弾！と銘打った、同著者による『二度目の大往生』(1995) も出版されている。

「世の中が平和でも、戦争がなくても
人は死にます
必ず死にます
その時に生まれてきてよかった
生きてきてよかったと思いながら
死ぬことができるでしょうか
そう思って死ぬことを
大往生といいます」

これは、永六輔（1994）の『大往生』の中で紹介された、一つの「死生観」である。

山本一成・柏木哲夫（1995）はこの部分を取り上げて、「大往生」という言葉の響きの中には、老年になり人生でなすべきことを立派に果たし、住み慣れた家で子供や孫たちに見守られながら、この世に悔いを残さず、苦しむことなく眠るようにあの世に旅立つようなイメージがある、と分析して、そのような「大往生」に多くの日本人が憧れているから、このようなタイトルの本がよく売れるのだろう、と推察している。

現代医療に疑問を抱き、長らくホスピスでターミナルケアに従事してきた医者としての偽らざる実感に導かれた「理想的な死のあり方」としての「大往生」のイメージであろうか。

＜突然死＞・＜大量死＞・＜引き延ばされる死＞・＜病院での死＞の４つが現代人の死の特徴であり問題点である、と指摘されて久しいが、特に後半２つの＜死＞の様相に長らく直接関与してきた医者としての感慨でもあろうか。

ところで、1977（昭和52）年に＜病院での死＞が＜家庭での死＞を上回って以来、＜病院で

の死＞が増加している。1981（昭和56）年には癌が脳血管疾患を抜いて日本人の死因の第一位となり、統計的には約４人に１人の割合で人が癌で死亡していることになる。そして、現在その癌による死亡者の90％以上は病院で死を迎えている。ところが、山本・柏木の指摘を待つまでもなく、現在の日本の大多数の病院は、残念ながら死を迎えるのにふさわしい場所とはほど遠いのが現状である。さらに、山本・柏木は、病院は病気を診断・治療して延命することを最優先するようなシステムのもとに運営されており、そのために多くの末期癌患者は、現在の医療技術の水準では治る見込みがないにも拘らず、最後まで検査や治療を受けながら、医療器械に囲まれて死を迎えることになるか、あるいは多忙な病院の治療システムの中で取り残され、不安や孤独の中での死を迎えることになる、と現代人の＜死＞の特徴の一つである＜病院での死＞の問題点も指摘している。

しかし、“人間らしく”生き“人間らしく”死にたい、というのが私たちの願いである。だからこそ、私たちは、ホスピスでのターミナルケアの理念に共感し、ホスピス設置を切望するのではないだろうか。

したがって、もはや「死」をタブー視するだけではすませられなくなってきた、このような状況の中では、統計的に癌患者となる可能性の高い“死すべき”私たちとしては、今後、＜どこで死にたいか＞・＜どのように死にたいか＞などを自らに問い掛けながら、私たち一人ひとりがその人なりの「大往生」を求めて生きて行かざるを得ないであろう。＜人は生きてきたように死んでいく＞のであるならば。＜生きる意味＞と同時に＜死に様＞について自問自答・自己放下する自己探究のプロセスの中にこそ、教育心理学の多種多様な課題が生まれてくるであろう、と考える。この点についての試論は次章で述べる。

b)加地伸行の「大往生」論

ところで、この『大往生』に対して、加地伸行（1994）は、「儒教によって得られる大往生」の中で、日本人が心得るべき伝統的な死生観はなにひとつ書かれていない、と批判的である。必ずしもその論拠に疑問点がないわけではないが、示唆に富む興味深い論考なので、少し引用が長くなるが、紹介してみよう。

> 「人間には必ず死が訪れてくる。人はだれでも死ぬ。そのため、人間は死を恐れ、なんとか死から逃れようとあがく。しかし、死はどの人にも必ず来る。」

加地は、これを出発点として、「もし死がなかったとしたならば、どうなるか？」と問いかける。「人間に死がない」－となると、いつまでもいつまでもこの楽しい世の中に住み続けることができるわけで、人々は大喜びすることであろう、とひとまず推察しておいて、「果たして喜ぶべきことであろうか？」と問い直し、「必ずしもそうとも言えないのではなかろうか？」とたたみかけ、「もし死がないとなると、実は大変なことになるのである。」と、その「大変なこと」を第三番目まで分析して、この問いへの結論を導こうとする。

「まず第一は、地球上に人間があふれかえって、食糧の争奪戦となる。しかし、食糧は限られているので、腹いっぱい食べることが困難となる。人々はいつも飢えていて、話といえば、食欲を満たそうとするものばかりとなる。もちろん、いくら飢えても死なないのであるから、まさに四六時中、<餓鬼の世界>となり、それが永遠に続く。」

「第二には、大変ないじめが行なわれるであろう。なぐっても蹴っても死なないのであるから、小学校はもちろんのこと、大人の世界に至るまで、暴行が平気ということになるだろう。毎日毎日がけんかである。それこそ、けんかばかりしている<修羅の世界>でなくてなんであろう。」

「第三には、人間は死なないのであるから、昔の人というものがなくなる。たとえば織田信長も豊臣秀吉もわれわれと同時代ということになる。それどころか、だれも死なないのであるから、変化や進歩などというものがなくなり、歴史というものが成立しなくなる。当然、歴史を柱とする文化も伝統も生まれることはない。織田信長どころか、類人猿かなにかそういう姿のままで地球上にあふれかえっているということであろう。」

そして、結論として、類人猿みたいなのが、修羅と餓鬼とになって押しあいへしあいしながら永遠に生きているという地獄図であり、みなが生き続けたら、前述のように大変な<苦の世界>となるのである、と述べる。

ここで、どうしても私は疑問を投げかけざるをえない。前述の大変な苦界の様相はすべて、「この世に生まれた人間はだれ一人例外なく必ず死ぬ」という“事実”の下に、そのような人類の歴史を背負って、その歴史の限られたある時間を生きている“加地”という一人の人間が、<人類の始点から死がなかったら>として想定した思考世界の産物ではないか、と。

つまり、ここでの判断はすべて「人類の始点から死ぬべき運命にある人間がその歴史（人類史・個人史）をもって想定した世界」である。

だから、ここでの論拠には少し疑問が残るのである。なぜなら、私たちは、人類の始点から<死>というものが存在しない世界に生きて来ているわけではないのだから。そもそも<人間が死なない>のなら、本稿で取り上げようとする問題など起こりようがないのでは、と。

したがって、前述のような“中国哲学の専門家”の論理の展開は、私たち「人間がまさに生きて死ぬ」という実存に、どれほどの意味を与え得るものなのであろうか、と疑問の波紋が拡がるのである。しかし、これ以上の瑣末な疑問はこれでひとまず置くことにしよう。

実は、加地は、死を否定することは不可能なのであるから、死を当然として覚悟することから出発しなくてはならない、と提言しておいて、たとえば仏教を信じるか否か、浄土を信じるか否か、すぐに死後は浄土の世界に往って生きるという<往生>を信じられるか否かで、信仰を持つ人とそうでない人との二つの道に別れ、そこで問題になるのが後者の人々であり、日本において圧倒的であることを指摘することにこそ力点がおかれており、彼の主題・真意があったのである。そこで、現代日本人の死生観のまとめにかえて、加地の主観する死生観を紹介しよう。

「人間は精神と肉体とから成り立っている。死後、精神（魂）は空中に浮遊（遠くに行かない）している。そこで、その魂はこの世に招く、すなわち招魂して魂を慰める、慰霊することによって、死者の精神を安定させることができる。」

「一方、肉体の方はどうか。肉体は魄というものになる。この魄もこの世に招き寄せる。これを復魄という。さて魂の方は空中への浮遊だから管理の必要はないが、地上に残る魄は管理する必要がある。この魄とは、死後、事実上は白骨によって表される。そこで魄（実際は死者の白骨）を管理するものとして墓が作られる。この墓の中の魄（白骨）を慰める。それだけではない。儒教は、「子は親の遺体（コピー）である」とする。すなわち、子ども

という自分のコピー、子孫あるいは一族という自分のコピーがこの世に存在し続けるならば、自分はこの世に生き続けることができるに等しい。すると、たとえ己れという個体は死滅しても、子孫一族の形で、この世に長く生きることができ、肉体の安定を得ることができることになるのではないか。」

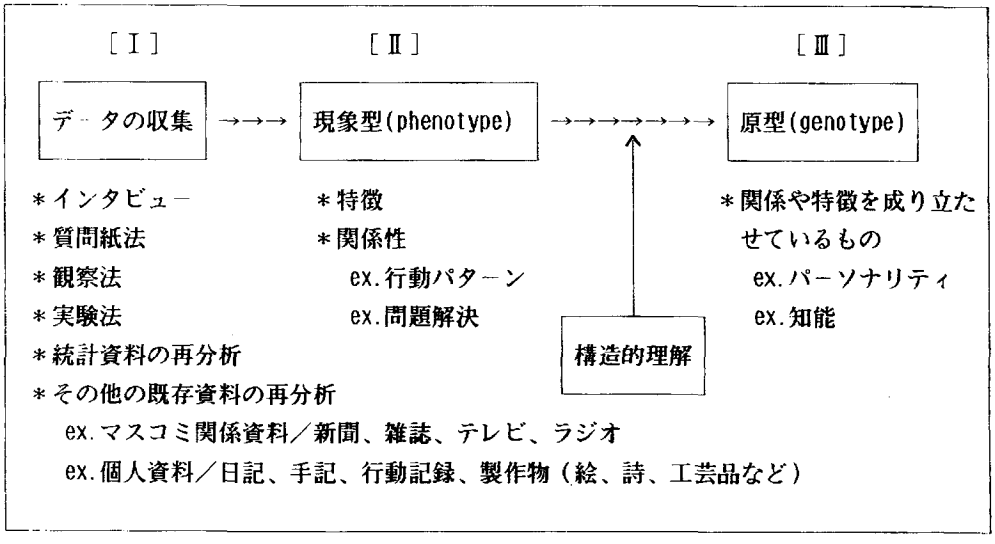
「このように、死を前にして、精神のみならず肉体の安定を得ることができるように説くのが、儒教の死生観なのである。そしてそれが実は大部分の日本人の心の中にある死生観なのである。それを知らずして大往生はない。」と。

c)永六輔と加地伸行との<死>へのアプローチ法の比較 ― 教育心理学研究プロセスから ―

さて、本項ではこれ以上「大往生」論に立ち入ることはせず、ただ、この二つの「大往生」をめぐる死生観、また、両者（永六輔と加地伸行）の<死>へのアプローチの方法に注目するように指摘しておきたいのである。

すなわち、前者は巷に生きる無名人の話の<盗み聞き>をまとめた「名語録」からの知見であり、後者は中国哲学に基づく思索の結果としての知見である、と考えられる。

そこで、教育心理学の研究のプロセスに当てはめて考えるならば、前者は研究の第一段階である［Ⅰデータの収集］から研究の第二段階である［Ⅱ現象型］への途上にある、と考えられるだろう。後者は研究の第二段階である［Ⅱ現象型］から研究の第三段階である［Ⅲ原型］への途上にある、と考えられるのではないだろうか［図－1　研究のプロセス　参照］。



図－1　研究のプロセス　（梶田叡一<ERK>:(1989)）

Ⅱ．教育心理学の立場からのアプローチ

本章（Ⅱ）では、前章で述べた<臨床老年行動学>の研究課題、とりわけ<死>の問題に焦点化して、それを教育心理学の課題としてとらえ直し、その課題への教育心理学の立場からのアプローチについての試論を述べる。

それに先立って次節から、筆者の志向する<教育心理学>のあり方を明らかにして行きたい。

Ⅱ－1.「教育心理学」とは何であったのか

まず、本節では、従来どのようなものとして「教育心理学」は考えられてきたかを代表的な定義によって確認しておくことにする。

［定義1］：沢田慶輔（1972）によると、教育過程を心理学的に研究し、その理論を教育問題の合理的解決に適用し、さらにその結果を心理学的に検証することを目的とする科学、である。

［定義2］：塚田毅（1977）によると、教育心理学は、教育に関連する諸事象について心理学的に研究し、教育の効果を高めるのに役立つような心理的知見と心理的技術とを提供しようとする学問である。――教育過程に関する心理学的な事実や法則を究明し、教育の合理化・効率化に寄与し得る心理学的な方策や技術を開発するということが、教育心理学にとっての重要な課題である。

［定義3］：天野清（1985）によると、学校、家庭での教育・訓育活動、そのもとでの児童・生徒の学習や活動およびその相互作用の結果として生じる子どもの精神発達、人格形成の諸過程など、一般に教育過程・教育事象といわれる諸過程・諸事象について、心理学の方法で接近し、それらの諸過程の心理学的合法則性を明らかにし、その事を通して、教育実践に貢献することを目標にしている心理学の一専門分野、である。

次に、梶田叡一（1995）によってまとめられた、「教育心理学」という名のもとに研究されている主要な領域について、以下に述べる領域があることを確認しておくことにする。

ただし、①～④までの領域が、教育心理学の伝統的な4領域である。

そして、各領域に対して<臨床老年行動学>からの課題の素描を試みることにする。

①［成長・発達］：主として乳幼児期から児童期、青年期に至る成長・発達の過程とメカニズムを明らかにする。最近では、さらにその後の壮年期、老年期にまで至る過程を含め、生涯に渡る全過程について心理的の面の変容の経過と発達的特質を探求することも多い。

→<老化と死>の身体的・心理的な変容の過程やそのメカニズムについての解明はこの領域と深い関連を持つ課題となるだろう。

②［教授・学習］：教育のプログラムや指導の方法などの心理的基盤を明らかにすると同時に、教授側の諸条件との関わりにおいて、新たな認識や能力、態度など獲得がどのように行われるか、その過程とメカニズムを探求する。学習の過程やメカニズムを中心的な関心とする場合と、カリキュラムや授業など指導の側のあり方や条件を中心的な関心とする場合とに大別されることもある。

→生涯教育が要求され望まれる昨今である。したがって、高齢者のための教育プログラ

ムの開発や指導方法などをはじめ、高齢者の学習過程やそのメカニズムなどを探求することが必要な課題となるだろう。

③［適応・人格］：社会的・文化的な環境への適応・対処の過程とメカニズムを明らかにすると同時に、その過程で心理的・社会的な問題が生じた場合における援助・治療の方法を探求する。

→現在＜寝たきり老人＞の問題と関わって深刻な問題となっている＜老人痴呆＞の心理学的・行動学的メカニズムの理解や＜痴呆老人＞の介護や対処法なども課題となるだろう。特に、痴呆化の過程で生じる心理的・社会的な問題に対する援助・治療の方法が重要な課題となるだろう。

④［測定・評価］：学力や能力、性格や適性などに関する測定法の研究開発と教育における各種評価の基準・手続きに関する研究を行うと同時に、測定・評価の教育的意義を探求し、教育プログラムの研究開発の中に生かす。

→高齢者理解のために、また高齢者対象の教育プログラムの研究開発のためにも、高齢者用の能力・性格・適性などに関する測定法の研究開発も今後必要となるだろう。

⑤［障害］：疾病や事故によって、あるいは遺伝的な理由等で、各種の障害を背負っている子どもの発達過程を明らかにすると同時に、それぞれの障害に対応した教育のあり方について研究する。

→痴呆化だけでなく一般的な老化現象に対応した広義の教育のあり方についての探求も必要となるだろう。

⑥［人間関係・集団］：学校や組織、地域等における子どもの遊びや学習の様相を人間関係や集団性といった視点から研究し、その教育的意義を明らかにする。

→老人大学や老人会などにおけるの老人同士の人間関係や老人集団などについて、社会心理的ならびに集団力学的な方向からの研究も必要であろう。

⑦［環境・地域・文化］：子どもの発達に対するマスコミ社会的風潮などの影響について研究すると同時に、その時代・社会の「子どもの文化」について研究し、子どもの発達を支え枠づけている社会文化的諸要因を明らかにする。

→この領域で、人間の＜生命の尊厳性＞・＜死の厳粛性＞への感受性の低下に関わる社会文化的諸要因を明らかにする必要があろう。＜自殺＞・＜希死念慮＞・＜暴力＞などが生じる身体的・心理的な過程やそのメカニズムについての解明と同時に社会文化的諸要因を明らかにする必要があろう。

⑧［教師・親］：子どもの発達に直接的に責任を負うべき広義の教育者のあり方について研究し、望ましい教師や親のあり方を探求する。

→特に、この領域でこそ人間としてのあり方・生き方を探求することが期待される。その探求の中で＜老いと死＞の意味が探究されるべきであろう。

以上が、最近の教育心理学研究における主要8領域であるが、＜老いと死＞の課題はこれら

8領域に相互的に微妙な形で関わる学際的な課題となる、と思われる。ここでは、想定される課題を素描しておくだけにして、<老いと死>の課題が教育心理学における主要8領域と、具体的にはどのような相互関連性を持つものであるのか、という考察は<死への準備教育論>を構築していく過程で検討すべき今後の課題とし、ここではこれ以上立ち入らず問題提起だけに止どめておきたい。

また、<臨床>という概念の考察においては、<臨床老年行動学>や<教育臨床心理学>などと近接する臨床分野である<臨床教育学>の次のような視点・立場が大いに参考になるであろう。

すなわち、皇紀夫（1994）によると、臨床教育学は、教育における学問的な専門主義化と実践的な細分化とによって教育の意味が分断され個別化されていくという、いわば教育をめぐる意味の転換状況 ― 教育を支えてきた意味連関の危機と再生の状況と読んでよい ― のなかで、教育現実を理解する新たな視点を開くという課題をになっており、臨床教育学の立場は、教育を教育諸（科）学へと分解して、部分化された教育現実を実証科学的手法に分析しようとするものではないし、また、教育諸（科）学の知見と技法を「応用」して教育現実に発生する諸問題を「解決」することを意図するものでもない、とする視点である。

Ⅱ－2．めざすべき<教育心理学>から<臨床老年行動学>へ

前項（Ⅱ－1.）で概観してきた領域の外にも、<心理学>と<教育実践>との接点を重視するべき領域はあるであろう。しかし、そもそも<心理学>と<教育実践>との間には、本来、表裏一体の関係がなくてはならないものであろう。そうでなければ、「心理学的基盤をもたぬ教育実践は盲目である」と言われるであろう。と同時に「教育的現実、特にそこにおける人間的な成長発達の具体的姿を知らぬ人間理解の学＝心理学は空虚なものでしかないであろう」と。そして、この指摘は、めざすべき<教育心理学>からの<臨床老年行動学>においても、自戒すべき基本的視点である。

また、従来の教育心理学は、①学校教育に関係する心理学的知見を集めたという事情から、どうしても“寄せ集め的モザイク的なもの”になってしまい、“基本的な体系性とか一貫した基本的視点が明確でない”、②教える側も学ぶ側も教職免許取得の要件を満たすため、といった感覚で義務的にやっていると面が強く、どうしても“他人事的で非主体的になってしまう”、といった弱さをもつことが、梶田（1995）をはじめ多くの人によって指摘されている。

この最初の方の指摘は、特に、今後の<臨床老年行動学>のあり方にも一つの留意すべき点が含まれ重要な示唆を与えている、と思われる。すなわち、<老いと死>に関係する、医学をはじめ心理学、教育学、社会学、哲学、生命倫理学、人間学、文化人類学、宗教学などの多種多様な知見を数多集めただけでは、真に学際的な研究とはならず、寄せ集め的モザイク的なものになってしまうので、やはり基本的な体系性とか一貫した基本的視点を明確にしていく必要があるだろう、と。

さて、ここで筆者が目指し求めている<教育心理学>について少し述べてみたい。

梶田（1995）によると、「教育」のための教育心理学であるという性格づけを堅持しながらも、先に触れた従来のこうした弱さを克服し、体系性を強化しつつ、人間研究に関わる諸領域の中核をなす独自の学問分野として新たな教育心理学の建設を目指す、という動きも強まってきている。たとえば、アメリカ心理学会（APA）教育心理学部門が設置した「教育心理学の未来」委員会による、今後における教育心理学のあるべき姿・性格づけについての報告がある。ただし、アメリカ心理学界の見解では、「学びと教え」といった直接的な教育活動の過程に焦点が絞られ過ぎている印象があり、心理学の直接的な形での教育的適用という課題意識が強く出ている、と梶田は指摘した後、さらに続けて、心理学と教育の関わりから出てくるもう一つの課題、「教育研究による心理学の深化・発展」という側面を重視して、教育実践に役立つような教育心理学の建設という課題をも、こうした人間学的課題追求の延長上に位置づけることを提唱している。

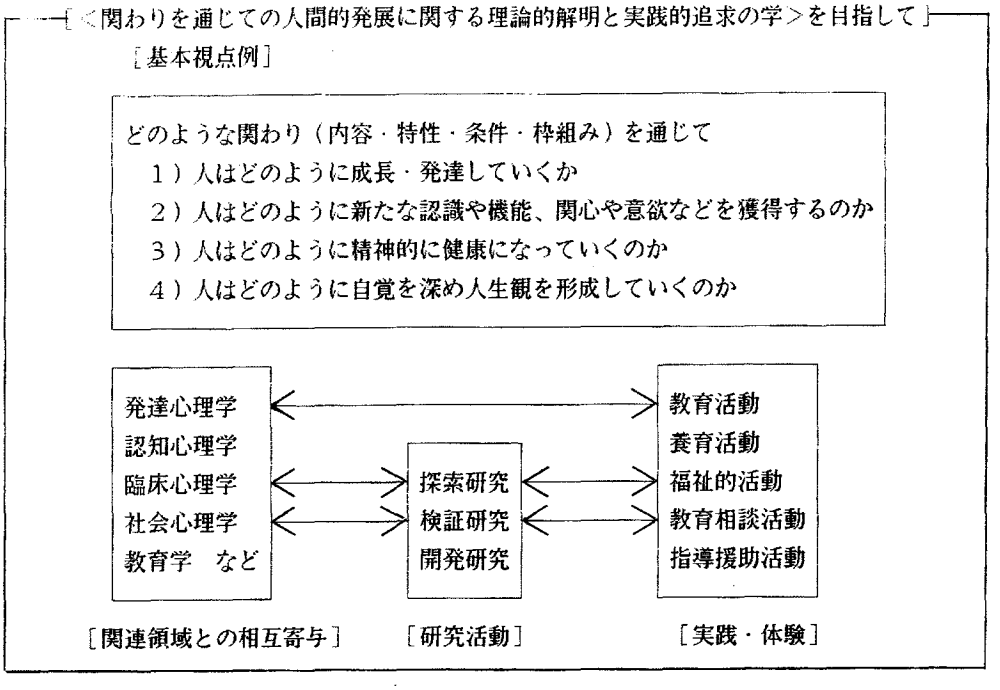
また、わが国での従来の教育心理学の性格づけ論争を検討した結果、次に示すような3つの水準があり、最後の第3水準の教育心理学こそが他の水準の教育心理学研究の土台になるべき出はないかと提案している。そして、あるべき教育心理学の基本構造（図－2参照）を示しているのである。

第1水準：学校での教育活動のための教育心理学［ミクロ教育心理学］
- ＊子どもの発達・学習・適応・評価に関する研究
- ＊学校カリキュラム（教科など学びの領域の内容と組織）の心理学的研究
- ＊授業や教育活動運営の心理学的研究
- ＊各種の障害をもつ子どもの学びと教えの研究
- ＊学級づくりや学校運営に関する心理学的研究など

第2水準：教育政策や教育制度の教育心理学［マクロ教育心理学］
- ＊学校段階の区切り方と各段階での教育のあり方に関する心理学的研究
- ＊学校以外の各種教育機関・施設のあり方に関する心理学的研究
- ＊生涯にわたる学びの助成・援助のあり方に関する心理学的研究

第3水準：教育可能体としての人間についての学［ゼネラル教育心理学］
- ＊生涯発達心理学および実存的人間理解に基づく人間的成長過程の研究

最後に、あるべき教育心理学の基本構造のまとめとして、その構造図を示しておきたい。



図－2　あるべき教育心理学の基本構造　（梶田叡一 ERK　1990）

以上が、目指すべき今後の教育心理学の方向性であり、筆者の志向する立場でもある。

Ⅲ．おわりに　－＜力強く生きるための死への準備教育＞に向けて－

本稿のまとめとして、＜臨床老年行動学＞から＜教育心理学＞への課題として、デス・エデュケーションについて少し試論を述べておきたい。

藤田禄太郎（1988）によると、『死の教育＜Death　Education＞』という概念は、今日、必ずしも完全な一致をみているわけではなく、その意味では「Death　Education」という概念は未だ熟していない。また、その内容領域からみて、「ターミナル・ケア：Terminal Care 」を中心とした概念と、「セルフ・リアライゼーション：Self Realization」を中心とした概念とが区別されているようである。

前章で述べた、＜第３水準：教育可能体としての人間についての学＞［ゼネラル教育心理学］に位置づけて、＜生涯発達心理学および実存的人間理解に基づく人間的成長過程の研究＞として、デス・エデュケーションをその課題とすることができる、と筆者は考えている。その具体的な教育モデルは、残念ながら、今回は提示できないが、本稿の目的が「教育心理学」の立場を起点にして、「臨床老年行動学」の研究課題をとらえ直し、それに対してどのようなアプローチが可能であるか、その方向を探ることにあったので、今後の課題としたい。

この試論を締め括るにあたって、永六輔による<死>のアプローチを採用して、筆者自身の読書による資料収集の一端を記しておこう。

＊　「よく死ぬための術」とは「よく生きる術」のことです。
＊　死は怖いものでも、恐ろしいものでもありません。
　一日生きれば、一日死に近づいているのです。
　死は迎えるもの、毎日心の準備をすべきです。

＊　私の“いのち”が人の役に立たないならば、
　何のための“いのち”でしょうか？
　こう考えることが生きることの根底にないのなら、人生は闇です。
＊　自分の“いのち”の大切さを悟れば、人を大切にすることができます。

＊　私たちの心の遍歴は厳しい旅路です。
　しかし、そこで得たものは貴く、だれも奪うことはできません。
＊　同じ繰り返しに思える毎日でも、
　永遠につながる一日であることを意識しながら、
　一日一日を大切に生きること。
　生きていることが習慣になってはなりません。

＊　生きる道は、人から教えてもらうものではありません。
　ひとりひとりが悟っていくものです。

つまり、一人ひとりの内面世界において<自らを問わざるを得ない存在>である人間としては、<生>と<死>の意味を問う過程で、<老化>の意味にも触れることになるのだろう。

このような「内省の問い」の中で、“私”は“誰かもっとよく知っている他の人間”に問うのでもなく、また自分で探求しその「答え」を手に入れようとするのでもなく、“私”は「問い」の直中で“自分自身を振り返る”ことになるのであろう。

その時に一人ひとりがその人なりに悟って「大往生」するのかもしれない。

[文　献]

＊永　六輔　1994　『大往生』　岩波書店
＊永　六輔　1995　『二度目の大往生』　岩波書店
＊加地伸行　1994　「儒教によって得られる大往生」　ＳＥＩＳＨＩＮ　ＰＲＥＶＩＥＷ
　　<誠信プレビュー>　第54号　ｐ.1～5

＊梶田叡一　1989　『内面性の人間教育を　－人の自立を育む』　金子書房
＊梶田叡一　1993　『生き方の人間教育を　－自己実現の力を育む』　金子書房
＊梶田叡一　1995　『教育心理学への招待』　ミネルヴァ書房
＊柏木哲夫　1995　『死を学ぶ　最期の日々を輝いて』　有斐閣
＊皇　紀夫　1994　「臨床教育学の展開　－臨床教育学の方法論的課題－」　京都大学　教育学部紀要　第40号　p.110～129
＊鍋谷尭爾　1989　『生と死についての一考察』　聖文舎
＊藤田祿太郎　1988　「『死』に関する経験・態度・認識についての調査研究（1）」　鳴門教育大学研究紀要　第13巻　p.133～156
＊ホアン・カレット　1995　『人の最期の言葉　生と死の思い』(山内加代子（訳))　新生社
＊松岡寿夫　1992　『デス・エデュケーション　患者の生命の尊厳と医療者の働き』　医学書院
＊山本一成・柏木哲夫　1995　「死を見つめて　－ホスピスの窓から－　」　大阪大学　人間科学部紀要　第21巻　p.199～221
＊山本惠子　1995　「教育における“問うこと”と“答えること”」　大阪大学教育心理学年報　4　p.121～130

For Clinical Psychiatry and Geriatric Behavioral Science From the perspective of Educational Psychology

Keiko YAMAMOTO

The purpose of this paper is to try to describe how "Educational Psychology" makes a contribution to the development of "Clinical Psychiatry and Geriatric Behavioral Science".

There are many problemes in "Clinical Psychiatry and Geriatric Behavioral Science", so we try to make clear how we can re-grasp the theme of the research of "Clinical Psychiatry and Geriatric Behavioral Science" from the perspective of "Educational Psychology", which has been my major.

We would like to emphasize the ncessity of "Death−Education" in regular schooling through the results of the cosideration.

On how to teach about "Death and Aging" for children, we must study this problem more closely.